

## 過去を振り返り、未来への想いを新たにす

2014年3月修了生

松尾友治

(あかつき証券株式会社 営業推進部)

### 1. はじめに：

高校3年生の時の三者面談において、担任のE先生は次のようにおっしゃった。

「松尾君、あんたはビジネスの世界には向かないから、大学院に行って、学者になりなさい」

私は未だにこの言葉を忘れたことがない。そして、E先生がおっしゃったことはある意味ではその通りだったかもしれないとも思う。

結果として10年間、何とかビジネスの世界で生きてきたが、先生のアドバイスに従ってアカデミックの世界に入っていたら自分の人生はどのようなものだっただろうか・・・。

よくも悪くも人生とは計画通りには進まないものである。そして、SBI大学院大学は学者を養成する大学院ではない。しかし、E先生の言葉を意識し続けてきたおかげで、SBI大学院大学に入学する機会を得たのかもしれないと思っている。

私は2014年3月にSBI大学院大学を卒業させていただいた。それから約1年半が経過した。今改めて振り返ってみると、本学で学ばせていただいた2年間は、働きながら学ぶという点では、非常にハードな2年間であったが、今となっては私の人生の宝物とも言えるくらい、これまでの人生の中で最も充実しており、最高に有意義な時間だった。

本学で学ばせていただき、最も深く心に刻まれたことは、「事上磨錬」ということである。この言葉の意味をgoo辞書で確認すると、次のように記載されている。

実際に行動や実践を通して、知識や精神を磨くこと。明代の王守仁（陽明）が学問の修養について、日常の行為を離れて思索する静座に対して、実際の日常の行動をこなし、これを通して修養するのが真の学問であると述べた説。「事上」は実際のことに当たりながらの意。「磨錬」は練り磨く意（※1）

これは、平たく言えば、「学びを机上の空論で終わらせるのではなく、実際の生活や仕事の中で活用し、更に学んでいくこと」と私は理解している。

過去を振り返り、未来への想いを新たにする

なお、北尾学長のブログ「北尾吉孝日記」、タイトル「自己を得る」では、次のように述べられている。

・・・学を学として知識に留めておく限りにおいては、殆どと言って良い程実際の生活において役に立たないものでありますから、行を通じて血肉化する中で本物にして行く必要があります。即ち、日々の仕事、あるいは社会生活において常に事上磨練し知行合一を実践して行く中で始めて、その人の人間においての実質的な進歩向上が見られるのであって、そうでなければ永久に自分自身は知り得ないということです。」(※2)

SBI 大学院大学で得たものは、経営学の知識(教科書的なもの)に留まらず、経営(ビジネス)を実践していくために必要な思考法や、バランス感覚、志、人的ネットワーク等の実践力であると思っている。

私は、こうしたものを活かしながら、MBAホルダーとしての自覚を持ち、微力ながら社会に貢献していきたいと考えている。

以下では、現時点における私の志とその実現のための具体的な行動、及びSBI大学院大学で学び身についたこと、今後の目標などについて言及していく。

## 2. 吾人の任務：

田久保善彦他著「志を育てる」(東洋経済新報社)によれば、志を「一定の期間、人生をかけてコミットできるようなこと(目標)」と定義している。(※3)

私は、早稲田大学商学部の学生だった2000年の秋に、早稲田大学エクステンションセンターにて、当時マネックス証券株式会社で投資教育に従事されていた(現株式会社資産デザイン研究所代表)内藤忍氏の講義を受け、資産運用のイロハを学んだ。それをきっかけに社会における金融の役割の重要性を認識すると同時に、投資をする際に様々な角度から現状分析し、未来予想をすることの面白さを感じたため、2004年4月にワールド日栄フロンティア証券株式会社(現株式会社SBI証券)就職し、現在まで、一貫して証券業界の末端で働いている。

日本では、「貯蓄から投資へ」と言われて久しいものの、日経平均株価は1989年の大納会に付けた38,915円をピークに90年以降、バブル崩壊が発生、1997年以降はデフレ経済が続いてきたことも相まって、なかなか証券投資が浸透していない。例えば日本証券業協会の発表している統計によれば、平成26年度、証券口座を持っている個人は約2,200万口座であり、その数は総人口に対する比率の17.4%である。また生産年齢人口7,757万人に対する比率で考えれば、28.3%である。更に、証券口座は、銀行口座と同様で、必ずしも1人1口座ということではなく、1人が複数持っているケースが多々ある。このように考えれば、証券投資はまだ私達の生活

にとって身近な存在になったとは言い難い状況である。

では、証券投資はなぜなかなか普及しないのだろうか。それは多くの日本人は、学生時代に投資に関する正しい知識を学ぶ機会がない一方で、一部の営業員の不適切な勧誘行為も相まって「投資＝ギャンブル」だとか、「投資＝怖いもの＝損するもの＝やってはいけないもの」という誤った認識が蔓延しているためではないだろうか。

私は、このような状況を打開していきたいと思う。

限定的な範囲ではあるが、以上の問題意識を踏まえ、今の私にできることは2つであると考えている。

1つは、社内研修担当者として、研修の際には、単に仕事に必要な知識を教えるだけではなく、同業他社等の不祥事のケーススタディを用いた倫理的な研修も行うことで、証券会社で働く人間としてどうあるべきか、それ以前に、社会人としてどうあるべきか、人としてどうあるべきかという点を問題提起し、想像力を働かせて一緒に議論しながら考えてもらうことで、多少なりとも倫理観を醸成することである。

もう1つは、マーケティング担当者として、個人向けの投資教育を通じて、投資に対する誤った認識、もしくは正しい知識がないことに基づいて発生している投資に対する抵抗感や偏見を取り除くことである。このことに関する具体的な行動の1つとして、2014年11月、2015年2月に私の恩師である石川秀樹先生に依頼し、「あなたは夏休みの宿題をいつ終わりましたか？」というタイトルで行動経済学のセミナー（様々な投資手法がある中で、行動経済学的に考えていくと、積立投資を行うことが最も経済合理的であるという内容）を開催した。今後においても、様々なアプローチで、金融を身近に感じていただけるような投資教育を展開していきたい。

### 3. 人間学を学んで：

私はSBI大学院大学に入るまで、人間学（古典や歴史や哲学等）を学ぶことをしてこなかった。その面白さも分からなかったし、学ぶ必要性を感じなかったためである。率直に言って、本学に入学させていただけることが決まった際も、ビジネス系の科目には興味があり、受講を楽しみにしていたものの、人間学系の科目を必修科目として履修しなければならないことについてはネガティブに捉えていた。

しかし、北尾学長や守屋洋先生が担当されている中国古典の授業を受ける中で、その認識は大きく変わっていった。お二人の講義は、私が過去に受けてきた中学校や高校の古典の授業とは異なり、解説が分かりやすかったため、すっと頭に入ってきた。そして、その面白さが多少なりとも分かるようになり、そうなると、もっと人間学を勉強しないといけない、否、「もっと人間学を勉強していきたい」という前向きな気持ちに変わっていった。北尾学長は「人間学が本学であ

過去を振り返り、未来への想いを新たにす

り、知識や技能といった時務学は末学である」とおっしゃっていたが、今ではその意味が少しは分かるようになったと思っている。

この点は、本学で学ばせていただく中で、明らかに私の視野が広がった部分であり、人間学と出会えて本当によかったと心から思っている。

#### 4. 毎日レポートを書き続けて：

私が SBI 大学院大学で学ばせていただきながら身に付けたスキルで、現在本当に役立っていると思うものは、「書く習慣」である。

SBI 大学院大学では、科目によって分量は異なるものの、講義を1コマ履修するごとに、レポートの提出を求められるものが多い。従って、実質的には毎日何らかのテーマでレポートを書くことになる。当然のことながら、レポートを作成するにあたっては、何をどのようなストーリーで書くかを考えなければいけないため、「書くという行為」と「考えるという行為」は表裏一体のものである。

このことは、学生として日々取り組んでいる中においては、本当に大変なことだったが、今改めて振り返ると、この経験は私にとっては最高のトレーニングだったと思っている。

一般に、「頭では分かっているけど、うまく説明できない」という場合がある。しかしそれは嘘である。そもそも分かっているから説明できないのである。このことを明確に認識させられたのは、このアウトプットを中心とした大学院大学のトレーニングのおかげである。

私は、このトレーニングを受けたことにより、あるテーマについて考え、限られた時間の中でスピーディにアウトプットを出す習慣が身についたと思っている。そして、そのことが現在の業務の中の1つに最大限活かしている。

例えば、私は2014年8月18日より、現在勤務する会社において、インターネットを利用して情報収集する顧客層（現役世代で証券投資に興味がある方）との接点を確保することを目的に、会社の公式 Facebook ページとして「NISA つみたてプロジェクト」を開設し、ほぼ毎日何らかのコラムを書き、情報発信するということをしている。可能な限り毎日行う理由は、Facebook ページのアカウントを作ることだけであれば、誰にでもできることであり、大切なことはその後の対応であると考えているからである。

以上の行動は、マーケティング的に言えば、継続的に情報を発信し、情報の受け手に刺激を与え続けられれば、AIDMA の法則、もしくは AISAS の法則に沿って、人々の購買行動に何らかの影響を与えることができるのではないかとの仮説に基づいて行っていることである。心理学的に言えば、「エビングハウスの忘却曲線」や「単純提示効果」を踏まえた行動である。つまり、人の短期記憶は脆いものである中で、繰り返し情報の受け手に刺激を与え続けることにより、「NISA つ

みたてプロジェクト」の存在を短期記憶から長期記憶に移行させることができるのではないか。あるいは、単純提示効果とは、「ある刺激を見聞きする機会が多いほど、その刺激に対する選好性が高まるという効果」のことであり、情報発信を日々継続することにより、情報の受け手との心理的距離を縮めることができるのではないかと仮説に基づいている。(※4)

ちなみに、私が「NISA つみたてプロジェクト」のコラムニストとして、当初から目標としているのは、マネックス証券の松本大氏である。松本氏は、マネックス設立以来、約15年に渡って毎日書き続けている方であり、始めてから1年足らずの私は足元にも及ばない遠い存在である。現時点において、私と松本氏を比較した場合、知識、経験のみならず、何もかも及ばない。それでも北尾学長の講義で出てきた「量質転化の法則」を信じて、日々情報のアンテナを高くし、色々なことを考えながら、これからも書き続けていく。少なくとも、「継続力」では負けなつもりである。

この小論を書いている2015年8月時点において、「NISA つみたてプロジェクト」のページに対するいいね!の数は1,680件程度であり、決して多いわけではない。しかし、今後も継続する中で、この件数が着実に積み上がり、1万件、2万件、3万件となったとしたら、その時には当メディアの社会的影響力も格段に向上し、何らかのブランドイメージを作ることができているかもしれない。(ちなみに、現時点における野村証券のFBページのいいね!数は、約3.4万件である。)また、それに伴い、現在私が勤務している会社の知名度も存在感も大きくなっているかもしれない。そんな夢を持ちながら、夢を実現化するために書き続けていきたい。

## 5. 終わりに：

既述の通り、SBI 大学院大学は、本学(人としてどうあるべきかを追求する学問)として「人間学」を非常に大切にしている学校である。そして、私は人間学を学びながら、自分や他人を客観的に見るができるようになったのではないかと考えている。しかし、そのことは同時に、私は常に自分の能力の限界を感じているということでもある。そしてこのことが現在の私の学ぶ原動力にもなっている。

私は現在、SBI 大学院大学で学んだ人間学とは異なるアプローチで自分なりに人間を客観的に捉えるための学習を続けている。それが「心理学を学ぶ」ということである。これから数年かかるとは思うが、まずは「認定心理士」の資格取得を目指していきたい。

ちなみに、心理学と一口で言っても、その分野は多岐に渡るが、個人的には社会心理学が非常に興味深い学問であると感じている。社会とは人と人との関係性の営みのことであり、社会人とは、その中で生きる人のことである。「人は社会的動物である」という言葉もある。)そして、

過去を振り返り、未来への想いを新たにする

ビジネスも結局は人と人との関係性の中で生まれていくものである。このように考えていくと、私達は生きている限り、否応なしに自分及び他人とは何かを考え続けざるを得ないのではないかと思うに至ったためである。

私は、心理学を学ぶことで、少しでも自分や他人という人間を知り、そのことで、自分を客観的に見ることができたり、より一層他人との円滑なコミュニケーションが取れたりするようになる中で、人生を豊かにすることができるのではないかと考えている。

最後に、私が最近とても共感した言葉をご紹介します。

「相場では、政治経済だけでなく、歴史、心理学、宇宙論が大事」

この言葉は、私がセミナーの仕事で一緒にさせていただいている金融ジャーナリスト、元ファンドマネジャーの川口一晃氏が、ご自身の師匠の言葉として、よくお話される言葉である。

その意味は、「マーケットは、常に実態経済を反映して合理的に動くということではなく、それ以外の森羅万象も反映させながら動いている。従って、相場の世界で生き残るためには、視野を広くして、政治・経済以外のことも含め、色々な要素を加味して判断していかなくてはいけない」ということである。

偶然ではあるが、この言葉の中には、「歴史（人間学）」と「心理学」の重要性が謳われており、私がこれまで学んできたこと、そして現在学んでいることは相場の世界で生きていく上では間違っていないのではないかと考えている。

社会人として働きながら学ぶということは気力、体力、集中力、適切な時間管理等、様々な要素が必要となってくるため、それなりに大変なことではあるが、私はこれからも心理学を学ぶことを通じて、自分なりに学問の道を追っていきつもりである。

---

#### <参考文献>

(※1) 事上磨錬の意味 goo 辞書より <http://goo.gl/nN4fyJ> 2015年8月8日アクセス

(※2) 北尾吉孝日記「自己を得る」2012年4月20日より一部引用

[https://www.sbi-com.jp/kitao\\_diary/archives/201204205115.html](https://www.sbi-com.jp/kitao_diary/archives/201204205115.html)

, 2015年8月8日アクセス

(※3) グロービス経営大学院、田久保善彦(2011年)「志を育てる」(東洋経済新報社)

(※4) 長谷川寿一他(2008年)「はじめて出会う心理学」(有斐閣アルマ)